三輪物語

巻二、三

和書門 類
二六七二六號
一〇五函
八架
四冊

内閣文庫
和書 類
二六七二六號
一八函
一架
四冊

内閣文庫		
番號	和 26726	
冊數	4 (2)	
函號	182	382

国立公文書館
National Archives of Japan

三輪物語巻第二

いにしへより月の為清なる夜の空にもたとらしこそ社
参詣の宮御のこゝの所にお参りし宮居すく社にましぬる
に仏達見へ侍らん様に法やとせたらしかね侍らは
あやしひこととも二人ありハやと侍らんとも侍らたうらまし
名乗りて第一の君に入ます禰宜云今日に是ハ語物語を
心ありしみともたまはすとも奉ゝ情とる人侍るに虚中
かく教へて是ハまこをたんのむかし其後よめくれ、
てゆけんハ罪とはんと思ひ事をれとも天下たにけり
こゝも者ハ日月の光をいうらぬ世のうかく侍りし時

日本政府圖書
淺草文庫

あらそしハ雲上の恵ミとハ乃ミ常よ宮の霧を錦めたに
うけまつる事なる君か御徳ハ日月のかゝやかしく明
らかなる志しハおほしますこそ天か下の望らふかく
候ものハ天子をたのミ奉りまつる大臣下卿
をかしこまり奉りてその恩を心へ事をいへる故よおもし
しまらや家よまハいそかしく見に仰せをつくハはて
遣のうくまらくいそく色を待つの證をハおけまたも
知仁勇の三種の神徳天子の御身におハしますか
ハ千万余年ハゆうまなく天下とたもちたまふか
代々家を續代をいふ者そそしなひし藤氏の長者摂家

と云名乃なせし乃臣下の者ゑ天下乃盛衰の基なり
奢侈事ふまゐる其人かくしても官位さかんなりしハ君
臣共よ人民の道を失ひしもの事なれハ世ハ下の民に
よ仰せも征伐ト深くかゝらしめ始ふ民下こそ立ちて
詩者をもおハなからしに是深くこれ人こゝ寄りてすたれ
日々よ風俗やふるり不断しての武事に心ひきて
自征伐すへしと望れハ国々に人々をし山野よ時
して武事に習ふ者を民下こそ召しも出し入のいたゝき
功ある者よハ官位関部代給ハりぬましく藤氏の盛を
家武臣ふ奪れしかもしハ民家百家と云しけの

まして武家の天下となりて武家と云もむかしハ川流
末なりしを江南の橘ハ江北へうつしてハ枳と成る
ごとく社稷と云天下の權威として武家に移り侍りける
我国ハ神国なれハ其人の天子の位を奪ふ事を謹み
事なれは天子と諸卿との御官位ハ旧のことくにしたまひて
まつり御政事を武家にまかせらるゝかしこまりて治む
治ふ清事ともいふをなさしめ侍るや云達の事にて武
家の罪のゆゑにあらすによ禮楽を失ひける諸々
ともかくも成侍るなり公家の云ふ御学のさかしは節会
抔なりけりとこれ侍り禮楽共を備へて林の中畳一の

徳あるものは興りしかとも猶いにしへの律にかへりしこと
もへに代々に依りましく侍る東漸ハ仏法も起し古楽
の風俗猶天竺四海の間は古楽の残り留めけるハ日本
ならではところにに聖主絶て治まりし時とも日本ハ
東にあるにへしおもしき大なる苦労をしたまふの人く
の道を聞まさもなひくにおもひ取りして楽の道を起さんと
こはさしもなきにてみもかくまひ治らん事ハ天下に
勤めし事なる今の世ハ天下の政道にハあらさる
は士農工商の役ハ清らかなりて本統として養ひ
うしなうをなる清盛頼朝以来天下ハことにて将軍と

いかなる田舎にいつ思ひよれ中にも賤き者なれども
人心の靈なれバいましへ禮を守り神聖の樂を親
しみまじハりけるか風流なりと見聞しハ人道ハか
くし世々會歡なることなりと思へきは天の神
の德とし聞え此節なりはかなくもかゆへしなる
となるべしとへ遊代の事なりへてハ猿樂の能
拍子と踊ミ小舞三線とことしあしひ風俗の茶湯など
やり其夜請の俗歌成忠也ハ世俗に思なる所いく
らへとなる云樂の道といふもへなる事ならず也らし
昔ハ能拍子小謡於ハなるべし也人ハ面白くもなきこ古

樂とハよつく深くなしハ云さかゆとあり其心さとて小娃
樂よなけれしハ非由なれハ二年まの則ち以るの作法よ
行ひ為たりくよし強まし風俗風流なる事さ思ふと
吉ね也しハ何と作りし奥深くしめし思ふへ紀さ私ゆ
へにさしもへ君をと深きあはらぬ物さしへしかよ威形
なひし物ゆ様の古書のハ何もも猶そ成あるもは
家々の有職秘傳の事共多くなりてまりひしく家ハ也は
隨所ほ出しとハ十なりて給るに禮樂の道絶て風俗
なとのハそのバ移りて御饗ゆ心得がつくはり之遣
りし海つゝ其頃ひなりて其中所の節會等の禮樂

小ゝなれし真の禮楽といひ侍り按に小なれ大なるハ云事こそ有
織ことなく大なるハ道ハといひ侍る事なり古人も歌道な
きものゝ人ハ言語をしりて詩歌といふハ本なりとしての
枝葉實なりてそれ花とも云人侍りなり歌道の事ハ備
はるも志のない人なるぬと云人ハこゝろいへり本こゝハ道
徳の学ふかりしばいかゝしけ情よ花よおふ新になるとし
情とゝのへ人のたゝいひ出らバよのなかりなかりし歌のく
と学ふ者ハ言よみの義理なりでなり人へ清道とも尚
廣まりし心ハ賤しく歌の言葉ふたつく風流と侍り出もと
事なり本云し俗とよかれしなかハ常の詞みも平常なる也

しかりしへ〻人の言にとよみしハ今の人凡ゆることか
くう出とよおつきしぬとも成かいふにもかハ心と同の凡
ごとも常にかはしなきしたる事あそし實事とてふかしは筆と
云ぬにいふとその言ハ出る社なりいつとし色ハ風俗美か
ましれよ歌と成し洋来れくとせしなり常凡事もし
昔学とも今ハ風俗娟しくして常の心もなく常の
いさしおもふもぬ事る凡ハ言しも八外物もしむなく
し常の物語言葉ふつゝひとる言なり肉明らかなる人を
云はなし人称にいはね転ひゝ天地の律にて遊ひ給
つは風俗の縁もしかるいせりしれゆきしぬと知らはか

かれハ浅キを知るといふともしらしめて説とも
むへし人々の心にしたかひてよく心得ゆへに其心
に浮ふれハ古への昔の事をはいやしまぬ許なり
有職なりと第一として秘事すれとハ不家滅亡
なれハあしき人ハあしきの秘伝といふをひたすら伝る也
又式にも定め给へハ誰も知りて見て知る事なりけり
をも知る事と秘してならひ口伝すれハ大神大楽
の道家之藝者なとしてあるか法なりけり古家云々
の楽師なとの楽と秘して人の教へ給ふも人々の手にて
とかくされし楽の道はならぬものをと心得とお

こそ御問侍りしハかやうの事侍りて古来の家々に
いひつたへし事の中にも物かく歌のならひの給ひをかれ
まうけし侍られける有職歌道の秘事を其心得させ
せうしんの事のことのと思ひしうへにや侍るも
猶むかしを思ひ昔ハおしへのみちのみなもとをも伝へ候
御かく伝へさせ給ひて楽の道にてたゝかくハいましめて
にこそ給へぬ其秘事なくかくまもりて時の家ハ猶
盛なりし楽ハそれなりしかたちて其人の心と人の
ら風俗と琴をならひしよのおもてはそのまゝ此下
ハ書きの風吉猶あくまてとハ得させ給へ草子にてせ

琵琶箏をもしらけしなすこしまて神おもしたゝしきを所見ん
いへり龍笛をしらハ楽人師らしておもしろきもの善き事の
其中のゑみ物をもとなく楽人ハえ見せぬやうにて共人ハなく共
侍ととなへ給ふとも侍とも我をかとりて道ある人
らうしもたうく日用にいやましてのはらひなりとも
らぬなく人の糸竹の道ハ入山となれは音あり物しハ
其心の名を人々なるは様侍りきかハと官位たかくなら
ひ来りてきこえいふもうらきハあらぬ今の世百人か
九十七八人申しハ侍る付ちろ中にも一人二人いまた
しるもの物の音ともしらん侍て人ハおもしろき人なり

こと騒しからしむハ浅ましく道々にも志ある人なれと好むる
其人々のおもしろきねの音をつこ好む世中にも常のひろく伝へし
あまねくなれとも侍らハ楽の道をのみしく遠き事なる
何事も好くなる人の所作ハまことにたゝぬものなる侍ハ為さぬ
ここら侍とも見えしてたまへの上手にて侍ぬもしくは後もまたまたね
為しこくらもしてこころへらぬも所あるを為しまゐらせし道
徳の其のおことなくしも其心の盛ひとくらしくおほは其れ音
なれハ非ぬありひ侍んにや物かくとなるハなかく好むなる
なれとも我をの歴々の筆跡にハ侍りつゝまたとも其人
何事にも侍るなれましもおもしろき人楽の道ハ深く極くれ

おもいきる心をおこしてたのもしき心を御かた
たのむ事なりけれは人々にたのもしく武勇をたかひ
めされし事なれは我は大将として常をまもり楽の位をな
くしてつねにからかく楽をはかりこごらんとは
いかなれはおこしをやみ右織の大事に用ひぬ人を
用ゐ、一もひさう我等とけらん章甫衣こからうこし
楚なれは人楚国はからゆかぬにたれはよらうへけり
こうんむかし戦陣に矢をつけてこし馬の轡をとらふ
ならひいしまのかくしけよりまつのつけ敵とこゝろ用
貴へく武者何の家なる武者をかくは渡しきれたし

たゞ深き心得にして見ぬ物をもしらぬ跡をもまなふ者眼
にやうも轡と見ぬ馬をも乗り得てしれる名
をつくるべき人の流を事なるもの者は万歳とかはならん
は武文礼楽の達者にて人々猶の稽古を以て何か行ひ
を入り聞きとする武者修しく人に家をも人猶たるらく
くにあつしは何の秘事なくとも武者にして能ひ用
ならはん人々とも勝くに風俗よりからそ轡をとり
秘したる時めでし従ひなん今は立て公家と
武士の如く神の如しと宮との成りけり
有りし武家は公家なれともまたちいさは心あるへし

武家の出来しても猶ただしからん時節と侍るなり
されば我等ハ公方ならしめられん上ハ天下の政を行ひ給ハん中
にも未然事の様に人々の思ひはかる楽の道を公
家第一の務とし中にも絃歌に當りてハ知らずハ
かなハぬ儀なり近代ハ此の勝なくハ國の事ハ
楽の道ハ廢しハいたづらに成事なり雅楽の音ハ
宮聲にして商角徴羽をなさしめてハ宮を本としかへりてかるる
なれバ宮ハ乱たるも宮に帰す宮ハ君なり商ハ臣な
り角ハ民なり徴ハ事なり羽ハ物なり君の徳厚く盛
なれバ臣令を受け民化し事をさまりて物正しき

なれバ也しかるに世俗の淫楽ハ絲竹の小弄雑に溺惑三條久
八年して其聲宮ハ何ならねバなくして是が高く徳なき
角徴羽なりて宮に加へて此君をかへしかつて君臣
をかへして民ハ目をも揺動する事なくさハがしく人物其
所を得ぬ也しかれバ後醍醐の御時に豊原の龍秋と
云楽人が此楽をきくに商の音ハかへりて宮の聲に沈
めり大家に音にちかき隠者の聲を調へて聞に宮
の聲を打つ隠者ハ龍秋にこたへて家に出龍秋
ハ隠者のかくいふをきゝて大家に行幸の人に見て直
にを宮中にして宮聲沈で商色かゝりといへる様をく乱

逆の事なかりし天皇武臣に困られさせられ候へ京都ハ西
六波羅の威勢に成たる人臣正しからさる時ハ天氣
逆ひ和音佞と多くなり武家の萬歳の事ハ思ひ候ふ内
まし候明日ハ昨日と思へは今日ハ后となる御今日陛下と
見候ハ明日ハ誰とかもしり失と見るへくも有道なれ
きそたし長久なるへしと云ことは志もなく候時のし
下る物と用ひく慰に一家一楽と思ハぬもや亡国の
淫声とも共すへしとても治国平天下の雅楽とハ撰用
ひ給ふとも候か危うし亡国の声とハ祝物を用ひ治平の
雅楽とハ佛事なとに用ゆへし天葬の憂あるへし御

ハ給ふへり天地神明にとられ天子の遊ひに用ゐらる
る古楽の雅楽を佛事にまして用る事ハ甚く浦奉るゝ
佛の極楽の遊ひとなりしハもろもろに伝へて出来る
用ひしハ古別の事なり翻と着て朝庭に用ひる楽
器を移し佛事に用ひ申す給ふにいかなれは如くの
古書にもたかふ候亡国の風と共すへしに人賢を放
かゝる力を得し一旦の威に勝せしめ後の費とならむ
見給はね武家の政風俗にも云ふ所ハ不當の君臣を
思ハ給ひしハ君を尚もたゝを不忠不孝の至りなれ
むも萬歳を期して一家一楽成りて候時のさかりに物を

移りて古礼を守り古楽を訛りて不正の形容音声物
事とハ林ふ中よいまた古楽の門よとらん朝よハ濃書
か色情とを久るは俗官の音やますゝ了り濃事御へ
しをけまし青侍青女房まても今様の風を来てハ淫
声俗事といふ事と知らずハかくなれ如くなれハ古楽
のすハおかしき様なる振舞ある長しくも俗事と知らし
雅楽の音よ似たる所あれハ淫声ハ聞ることけなりしく
たゞ心淫と悪心ゆゑ心のまゝに君なす事ハ善
とさとるにすなはち化するものハ妙なる事よ正律もとの
まことの目よハ正しきと見えぬけれバ声とハ云ふ

を正保と云ハ心よりハ道理を窮むべく是妙なる事は
まらぬハ風するにならぬる所音有様なりといふ
所あれ音たる術のかくとも事あらん心や事是秘事ハ道
相くて後の事わかり此の如くするハ人心皆霊あ
是唯のしやうはれごろうつらん直つよ道学をならむ者ハ
必と雅楽とてそ行そ好らくして直つて楽をならむ者ハ必ず
道とも学ぶべし相応なる道理を行ひそれより正しき
道なくしハ徳より事深きよ楽ハ正徳のこれあれ
まつ心信深ひ入ひとなら面白き所まよう志を
かくし楽の面白き所をとこまざハ淫声不正の事ハ見ゆる

を聞もけからしく成てその移り然るに今の人の家にも
百人か九十人ハ餘事なしハ唱歌をうたひ況や律呂
ハ何ぞしる所をもしらずらハ賛成と記しもろふ
と淫を云たふハ俄合たる其後ハ舞に雅楽其次ハ小
斉行たる吾すけたる三絃と云ハ絶てやにハうたひかしく俗
まり心なりしハ甚しく書讀をしハ人とならず俗共の所の讃
様に作りても遷讃ハかゝり小斉すまりは百僧これのも賞錢れ
中にそから俗成事よからぬてふ者移りしハ父母ことも
しらず青侍青女房に至るまで唱歌をそしも長くしも賤く
諸事のつくまで程の事ハ賤男賤女に至て事にいたくて

くもとつらひ人の心なしハ其所にする所ハ實事は見へひ
安らかる所そ成しし所不實事あるまよの移り楽ハ正に
くもひ煌とかくしも安するる所楽も前よあり中にして然
きらもすくにいはとおんやまのかなれハいりしかれとわか
御身にてなかの風俗の乱に雅楽のきとんすくてかくの起
まりをしハみるに芝移りすかの絶侍の小斉ひハ一旦の
耐ひに移るは人病と記りまりしまうらハ何もして遠の
たまハく我家ハ君臣共に常宮服前よ何まにハ振ぐし
う皇礼杯もといつらゑんか下か心ハ君臣ありそも叢
あらひ心安りて我か家を下か心とハ宮人ぞうしめへは大逆

世道にうとき事ハこゝろあハらまし ひさしくれたし 掟ハ則 要事
ニ成ても人のうへ礼記にも有る事眼前なる武家の御ハ何
事もいつも有事多く行ふ武家にても心をもちゐる事
此面白くも付ても事なくては慰ことも見えぬ人にも
なし正しき遊は此道にもまれなる人は餘義なき
事なれと僕といふ百姓なれとかくのごとくなれは武家
ハ是非なき事なり二つのまに其中に年八十にあまり
しる禰宜ありて申出して云 [illegible] 達 [illegible]
頼むの事もなき行 自ら二十ばかり入用親を
ろ者ある援 [illegible] はるゝくやして老てもいつとまたなりしか

法のやうなしハ其時まてハ摂家清華にハ御知行一二千
石より三四百石もしとは大臣家羽林家名家抔も清家ハ領二三
百石宛ハ拾らる御れ兄貧しくとも百姓の風俗ハ残
るしれたる其時よせても今の世よりも零落せる家ゝ公家にも
う非しも見るも扱はしく嘆かはしく行るも参内も輿もおほし
しきそは力者青侍侍なる衛ゝもなかりし時よく侍者
見る葬のお取次の為 [illegible] にも青侍すらもなれハなれとも兜小
性といひ行ら衣冠の貴に威の勧め奥方の入用ハけ
てハ二三百石の所領にてもしれず其日に及び給ひて
京わらんべに笑われハ困窮 [illegible]

松村ヵ用そらさるれハ借しか金ヲ以物ヲかへたるも色
らひ然るをもちいし為にするあるしれハ貪リ乱心
発リ心だそもも賤しく成けるさ大名れ縁者こ成もしハ女
かふこにかるらしたるを出さらしくし候ヲ家老をさんし若き
るまかりしくしも我へるともしかは笑ひかひしてかく
と後こ置か乱心ある者也世才覚のよらりつ代官やうれ
町人ふるも乾りて賤しき者の娘まても金ふつ待かる賄
いふこにこるれハむかるのへかり女を達持のまふ公儀も大
名の妾こなしそし我々あとこらもとしる子行るハ身成へし
かいるへ此たる人をみ治へり民間の地やうけ者

まてもみたこ武士の妻ハ三百石の人ですらも妻らし
てかまりもしくたるものと小身こそ婚ヘ可只目
前の経営にて親とも物こらするといふ一つき
事たおかしくしても人の使ひ者と成賤しれ名をまくるは
るにうさしまし侍ハ何ともたはくに親のたしなみもな
らひいうかし此事也は人の妻となる禮儀経事
とかるしもやうかうは物のおかしあらはいかて推
しこ禮儀成事のて賤しく心れ賤しき儀なく他きし事
たる公家也其かとも仍まし公家あかれた人の猶ハいう
何事も此者にも抱へて義の家のあきこ何ともおく事

御人のまへゝてまいらせ候物も御の事ゆゑして何事も
思ひのまゝにいたし候も食ごとくなり共頃役儀一人あ
りしもしたり並との外世ゟ家頃あら衆して三百石を
らしい孫りあいひよらぬ心たゝしさ御きひあにね
御人のみいかれかくをし給ふと目に参りまふ時も
三ゟ通したる衣冠めし青侍一人皆敬一人有ゝねきさ
りゝく出入せられあへり人まいらせも茶とうて出
しあふまゝかけし下の家中にも御ゝいて御術
御膳具ごの御とにしね事酒ハ出しあるゝひ御家
内物語うふし其事れいとつはししきへいひゝをる

御書の弊信箔の御遺しまへしてハきうつとをれおし将軍家
権柄の御方よに参考まさる禮として御とひへ三官の
武士に近あひても世禮しるいも親愛するれかゝるに
あゝけもし此式ハ公家の御思召可代にして今の将軍
あるとハてまとひしみし仏門に準しられしせられ其執権
人をもてしんたらし禮記かからとたる是れ御座しやこか
ゝられみんみ世官の武士同方の人をもしまへハこゝめてに
れはゝかく世をもてしも羽林名家の人ともやうましも大名
に職くの人ハこゝせよかくせすに相とやすさ此ゑつねに
今ハ大臣すもし指さし御しあくゝ同家の末うちも親悪

なる物ハ過てもあしく過ハ不及と覚へ侍りこゝかの
大臣家御分にも将軍家にもかゝる公方のことゝ同しよ
もこ其禮ある人紀事なり此方より望んて指出しも古於
頭とても遂に法なり趣方にもとも云しることの容の
礼とて宛しき振りるれハ出る振りの衣冠を正しく其身の官位
我用ひく出るとも其礼儀ありてし付もとも先有るもい
まゝくこハちゝひへある事なれとこ村の中に升のへましく
禮儀ハ事ある紀事なり又朝廷にてもなき紀卿意得ますこい
これらをし八老とも能くしても云ふ何学の事なれハ徳とも尊
増しくとも学ひ云ふ其侍事なる八営と比下の禮ともあらん

ら今の民生ハ化を出なる朝廷にてもありとし能くして化から
り全く對して禮といふことさんハ信伐心に從へさせ
人も時勢にしてとも我か我方より出て民もたて教ある紀
人之下れ合ハ本よりに如何様とも心さうしてまゐ向く
れたる細分をその程の種々歴々たるの民なひとこ民からハ
信心事もし日々にあられハ身よれ正しに。あらし何ほらひ
礼儀も多くもらに其紀事あるよかるへくもくあらし
大国の事といへとも化に此もとし我之者をもあるな
なとの小身をもとも其内とは慈悲のあるものにるとも新
云ふあるる大臣の官位にてとも小者あるへ志らひよ

せハ心あらん人ハ謹て重しまへ人ほきひハ然るに乃
武士と言ふ侍なきとし平相の人を食せしめ我ハ三方
まし盃をとりよせてハかへさしとおりて表向て宿
侍の體を用ひれ所よて聞ゑれ人様ハ事をせねはな
まらはいやよりて仕事なもの所を切との義なれハ何
かしこしかも人の事なに大名なりハ木具を家筑の
ちうしハ市にも客をして相伴なさとなすへなりハ
途挑足弁すハすゑの事ねり盃をさしかへいるねは
なりハさつてぬこ此きまし切りしハ一門よ他の相
伴と出しし我ハ引退而を掴きりる事をとも又或人の異

見てよて云振舞ハ去のいく酒のたまりて始めさと参りよ樂
かとつくひ去りとみとすさ人のいひし侍みはまりる
親なる者すし人出しくや々なむれむつゝめ寂なる武士
二十騎ともり同道して京へ入りてよりゆりて其中に
らふやうれ若き馬京一人の有し残りく人とハ何るゝ勝く
人うり然るよ其とらふ所為黨れハ大和我等の檀那
たまたるれ人なり皆ゝ同道の居去何の様と心思ひ
餘とこゑしとしかしくもひかふ一座もか色とやして面
ひ去りてきん人々く膳をすへ此叡のまらするか侍士ゝ
たれとや人なこ此若党のり此家常よからかられかうるんへ

とおもはれ候らんかしくも食を富貴へしとおもふは商
人なとたとへハ事ハ公家武家共にも心得て物まなひしかへに
もやう物まなひし併事せんとも信すへし此道ハ
有職并道と学まなひのたつへきにあらすしておもく
もつはら兵徳を尊ひし奉公の者多く何候ともよくも
能の結構の御振舞なうハかくうつりかはり思ひ入に候
茶の湯立出しかつと申すにはまね候ひしとてもへと酒食
の心あるへく職人なと者ハ参らせ候御前に領するものもせし繪な
ら見事なる所ハ繪にても師にあらさるともよく見る故に盛へし所から
ようふくおほしまても是の能世中にハ日本にことか

思ひ入れ武士ハ武勇ともうつり魅也として家内かはりく
して信用あつき持病に頓かけるにもかくも馬まてを申事まつる
知行ハ領知に内よりふかしておとしてあのわらうをさなりは以
偏に領すれる然るにもまた事ハなかなかそのれし能行さる
殊に御休みしておはしまし御まへ出仕候申したか候関へあな
まいらせたまひしハ異見の人に言葉をかくへしかくたまふ
つたなきに云神代の遺風にて今の世中凡等なる陳徳子
うちに国侍所の御神楽として日本に第一の
神事の殊に蒙と御下并に御役人存じて見奉る所
和歌の道ハ御業を蒙と一人此上に一人ともなりける并かくしハ

堂上地下に十餘人ともおもしろく御せと楽人といふものゝはし
本の拍子ごときのうふ人々ハ一二人なかりしハおもしろき其
人々うし合し出給しは七弦の調の多行の秘事にては
事多けれど郢曲の歌の秘曲ハ堂上にハ一人ともうけ給
はらぬあやしき伝事なくおもしろき其はかりも篳家ハ薄以緒卿にハ
一人ありしかとも御紀年不事といふ事によりて信長
より薄家を切腹させられし最期の時楽人安倍の季
房に指南して年頃の所望なりけれとて秘曲を伝へらる
篳篥よ薄共によりうしなへりし時薄家断絶するうへなれは
今は猿楽作りつゞき危き事なり信長と神楽頭と謝ら

此ころ奇特なりしとも薄家切腹の事ハ不仁なり武
家にてハ秘曲の切腹よりも流罪なりともよかるへし
おもしろきは其後秘伝の事中々よからぬ事もおほくとぞか
絶ぬるとこそ罷重くハ流罪にもせよ人紀の不仁也
へ不孝悪非殺害なりしかは人の世ならすとて違乱すること
御ことしやうふことく歌の秘曲絶へしなれは拍子絶ぬ
神楽とも志うるし調子たるもはかとの人々堂上小三四
人たなきし時もなき事なり和琴笛篳篥も堂上に二人
地下に三人宛人数をもちて三人ならハおもくし時も
此事なり本末の拍子作る歌の人ふらし神楽をつらせしハ

まことかゝる花事抔に公家花下世々を貪ふる故に見えし
ハ了傳へてハ我家に傳りしと思ふ事ハ将軍の以下其思量の
人出入りし事の譯といひし開て役領を附し其家なりし
かくと出ゆし侍らしハ今の公家のちからなきの事
事なりし今武家天下へ公家は禁中の公家に従ひ
しる之奉らんといふ迄と道ありしく敢之なきハよ
からん風情の跪きなきハ中々かゝる禁中の御
料に被奉り諸御家を家領と云て人の御衰微の後
なとて連もなきにハ中々たり今まで寳に
みことりて道の行なへしかく節花ものは迄ならぬ荷殿

ことくらきてかくまかりし御住居なる故ある事凡事抔の今の
御かくし屋もとも故ハ侍らしれハ其御假屋風雨凌
せらるゝ事にも思ひ作りかたふ給ふ作り故の節花之
道ありへつ見ることなくもふちめしつゝも御料も不自
由なるにはまふ奉り禮楽にこるとも侍とも抔に其禮
其楽の領ハ従人あるとも別に漆奉り御遊なとも月
まるにごとハそこらもまりぬ抔にあるハ諸家おの
ほらくハ何しか故事に狭りハ花抔かしん御遊なしとハ
定まり事もし大床下の石御殿上人楽人ことかゝるを
て必しも参ゝし石ハ侍るらくもらし奉る座給ふにある

禄は御所作の古きハ時乃御心のまゝにつき人ハしたかひ
天下乃御位ところく行ハれ世まり公家ハ花やかなる風流
ともなひ物ニ非ざりけれハ儉約朴素ハ古風興りて
おのれ／＼ある事もなく又らわ乃心ごゝろしか急しく修へし
驕りを以し非ざりし額多く又も用ひらるゝへし賤
しき風俗ニ成りぬ中の比ハ彼の公家ハ古家事なり
されど諸道節會などしけるに此事も是て是非ともせ
こゝらたどた家乃大事なりし心ニ礼の本たりと情状正
敷よりの急ぎハ節會礼藝者の出来しにたゝりし公家ハ
亡ひ侍らん武家乃賢君良相出て再ひ神代の遺風

残たる礼かん出しつくし行ハれ紀頼ニ許なり

三倫物語巻之第二終

三輪物語巻第三

天の孫天津彦彦火瓊瓊杵尊ハ當往の御壌にいまして
此国の御主と成給ひぬ大山祇神の女子木花開耶姫と
婚ひし給ひし火闌降命と彦火火出見尊の二男子を
生給ふ兄火闌降命ハ海の幸(サチ)おはしましけれは弟
ころ之ほしまし山にいましし獵弟のふ第の彦火火出見尊
ハ山の幸おはしまし父の尊まうちく兄弟たまふ
其後弟の命此給ひたし幸かへんとて互にしかへ
給へは共に其利を得す兄の命悔し弟に乞か
与へし其のつりへし給へとてつよくいふ時弟の尊

弟のほこをうしなひて新しくつくりてかへすに其時兄の
命小児の事とらへしへつとありかもとのほこをと
めしかは清故にしてせめしをのふ弟の尊憂へて
海辺にて海畔に吟ひ給ふに其所にて塩土の老翁と
云者に行あひ給ひしみちびきにて龍宮にいたり
給ひ其後てほこを得て帰り給ふに其ほかに
さらに龍神教へて潮満瓊潮涸瓊の二
をたまはりて帰り給ふて兄の命にたまはるへし
たまふ時龍神の教へのことくに貪りひとしく
給へは兄の命いかりをなして害せん心ありければ弟の尊
しほみつ玉を出しければ兄はたちまち海と成て兄溺れ
おぼれんとす兄の命悔てゆるし給へと申ければしほひる玉を出し
給へは忽ち平地と成ぬ兄の命乃心よく弟の尊を神徳
ある事をしりて後は事なくしたかひ給ふ事限なし後に成
て弟ふ龍神の[illegible]とさちは雨風をしたかへ火闌降の命の
まつりけり彦火火出見の尊ハ風雨を心のまゝにかなへ
得給ふ事かくのことし彦火火出見尊三年龍宮に住給ひ
し時龍女に幸して生給ふ御子の名を彦波瀲武鸕鷀草葺
不合尊と申すと云不合尊玉依姫を后として神日本磐
余彦尊と申すを生給ふ是は神武天皇と申す人皇の始也

みちおもむきひねりの衆生云足大雨芸命亡勇足大丈夫
出見尊よさいはひ事ゆくところへゆきまよひて足ハ物のまま
和まつりて玄覚丸にみすく事ハ物あハこれちりの
げこりあなとこうしえの會つ給まかへてまかりの、
し善順の道ありてふりはも終まけ役のやまもしらと
あてしはひし事ハ前漢世えあるまゆ尊徳あると
中りの事ハ理ありまゆりりの後世の教われたのかなと
中事はう俄ぶかしと法このかくりの説ありの教へいま道のこと字
ひと傳へしてかはものまゆあらは古今の秘抄これ
説に取かつて作りの各たへしり御覧しのかや出遊か

色の已然ハはかくこいわしに光前行の光さらにかひるまし
ここしあつもゆわか人さうつきつくへてと清しぬいハよも
齊なる者ハ法花の末まもれしさゆうハつよしいふ不達
ハ法にあなりまし法事わり天の神の御語ま御関儀り
給ひも給とそう踏みとけらも天よ二の白いのりしきも
かくもしう淘ひ御法ゆたにかまくへ給ハは神系ハまは古
給にこ法いう白給よいりひたしまゆうへとくつるま
まを共時のお給も立出てま公ハ賢者の徳にとそうひまひ賢者
ハま公の法にとそふ是給ゆまま公も法らし給わ人あ
見もなは天下平らか囚給もり賢者を玉ふるま御る德

国立公文書館
National Archives of Japan

かくし給ふて太業に能るへし徳となにもちる者ハ国
君といへとも匹夫の貪賤と同しく匹夫といへとも同
君の位と見て徳と位と相和して貴賤をさためかたく
今先苟も云迄もなくかれいとしてさら〱対屈をもてこ
王公迄傳せる所ハさかれの豪傑に尊くとハ先苟よりゆつ
りたまふ所の神書にハかつて此筆法多く一段明らかにせ
はすまとかくまいらせん先苟云ふ事なく物を通ぜ
神代より開ける神代にハ私照なく私親なし一人と仏
しらるとなりぬらる天下と給ふし一人をあらはし貴賤
わするもの神徳あるハ天下の給ふなるの尊し況

や兄弟共中にしてハ有徳をもて主とこそすれ其徳に随
ふと撰ひてもしも嫡の小国王へたに譲らるゝいふことなし
然るに東宮にてつかはる公事なから兄をもつて
弟にたつ有徳とさへいへは天下これにすなはちとして主と
定め給ふ兄たりといへとも大国諸侯の位にかなふる給はる
もろ〱命に此命ゆるしてたゝしく庶人とせんかはる御気色とか
たく給ふ弟ならしても庶民まて見る人ハ人君の徳に
そむきまつらぬ給ふまゝちかきとかくて威とゆへつくし両
りんへきことを古ハ朴素なるうちは君の民を率ゐるの次ハ則天
よりの御恩の所の人の尊さしく河との徳に徳と出ぬかし

つかし奉り従へり兄の命ハ忠にしてもちゐけれハ命
にしたかひ給ハハ父の尊の命にそむきて尊卑庶人によ
くらし我天下の君たらんとおほしめし思ひおくれ給ふ
給ましきも天下ハ人民をすくひ奉らんためハ治めたまふへし
まことの御楽しみをもてなしにけり。まことに本の御譲を
ふかくへりくたりて尊の尊を天下とか定めらるへり
尊の尊も人民の徳をも君にしてすへても庶人の賤しく
得かたしといふ事ハ深く思ひけれは出きても見せて食
求めらる事ハ叶ひし共に仁を施してつとめて本末か
争ひし窓なくしてへりくたり君にかなひし大学をも小学を

争ふこそ誠の義なれ。弟として兄を殺すといふハ不徳なり
し天の下治めまする事ハ叶ふまじ。たとへ尊の尊くともまた
まさに天下の賤しきものなりとも、わかれたる事ハ
御寛なりける尊の尊の海中へ入玉ふといふは宝珠
宮といふ所へわたし給ふ。これも皆仁智の徳かなし
まして大舜の象に心をもちゐ給ふに同じ。さるハ神のみ
の命たまふへき御事なれは治めて海の底までも心
をやすくしはかりへまつりて、ゆるされ宝をたまひ乾
珠満珠のたまふ人も凡情の人ならは一旦徳をもて勝つや
しかれとも天定まる時ハ又かならす徳の理をしるこか

く力ハ徳に勝る事あたはすその故ハ力をもつて徳ある
かたんとするハ水火にむかふかことくにして富貴した
ゆたかなる見えの勇力を誇る事ともいへとも徳ハたえなり
力ハ限りありて天ハ限りなくを戒ミぬそれ有徳の人たるより
天ハ限りなし故に武士ハこの心ハ是れ不肖なる人ハ武をもつて力ハ
終に徳に負けて争人ともに人望を成ば尊ハあらそひ治
ハされしも徳を慕ふ人しもそのいはゆる民をしたふへき
てもつては終に人民と成る事を幸ひに富貴しうりたく暫
く天下治の争ひとかたく徳と力と人とハ天下の勢ひと
ありうへき見之の命ハ何をもし風を起し雷雨を行ひ上

多ゆかしと云ハ火炎出見の尊徳ありし天下を治めのへ
きた風雨を民にいたしてかのくに諸民のためにいよ
き風雨と治りれをまふりけるかたはりの畢竟ハ五
穀みのりしはものの恵をも人の求る事なきは風雨
の時にたかいてしからは事あかれとも今日の行ひと見え
る者ハ利ある事と思ひけり又平生にも天運雨道あれ若ハ義
少しの事も勇ありて内心ゆるみては鬼神の罰に遇ひと
かくとしなりせむ勇の尊風雨の利と得のおそれ
ハ平生やはりたる者ハ義に勇みかかつて内心明らか
なる人ハ幽明に二つ則よせての道理と富貴有りて今

時をしらず待しかるによくしる者ハ清くあらハ晴と示ありて
ゆへに鹿島ハ得風雨の時ハ又の風雨をまさしくいかにしもしか
盈りて得たるの多き事あり海より利ハさまたけ得る事
成かくの如く一人の神をもつて天地ともニハ天下此主
これなくてハ瑞相見え人あつまる者ハ一張の弓と
ならし天下を治むへし漢の高祖ハ三尺の剣を提し
天下後三年といふ間に理なり烈風雷雨たえなく
治ハ衆の心をして常と是へ志ざして尊さ我かたに不惑ひ
治しハ度量の人なるかゆへなれハしかるへきの大事にもたる
仁愛を左備し其の命をたたへ是をハ治吟ひのふ

ある順徳ありぬれハ天地鬼神もたすけ給ふ事なれは是の
命ハ幸(サチ)なかれ人の私欲なり天理すなはちなくして利と
治し利とされハ治る不利ふさる一天の君たる人
ハ仁をむねとし万民を救ふる道なる事と誓ふる
志つかさどるの都是を以て仁徳なれハ天下とた
もちおさむるハ是なれとも仁徳あれハ天下と保つのふ
天地の気節ハ時の寒暑も一人の御心に感して是
なり一人の御心治正しき時ハ風雨も時にあり一
人の御心正しからさる時ハ風雨も時ならす利とある
利とハ心ハ吉さ不善とならす世の中の事なれは

こと又の御心悪くして風雪に偶て通路叶ひ難きハ
海舟あらし時にハ海舟もかなはぬと云ハ天命の分也と安
んじ是非もなし高成持ちひ事ともさかりの不時に其家業
をとも勤め難き事といへり神書ハもとより伝へ難く其
まじかりしと云ふに時に書たる其業者に道徳の学
なからし物に富貴の根を須ゆらるゝ人を知るべし富貴す
ことも荘周云の根の理と明らかに志てらはなかなか
し神祇の御事と凡人の上にかかるもしるしもなし太方な
しハ道かなはし心と定めて離して見るまではこれ
いうすゝ紀小しも富貴ハ偏なりゆる事なれ神明ハ正

直なる事をばたすくるにこそ書しるしたる所へ八禰宜と云ふ貪欲と
うち捨てたる後に偏に正直の御心を八相應也
といふにしてこの事にもせよ又公達云袖
書れ八さへのひかりを正直なる事を祢としての
又庶人の業ハ多くハ貪欲よりしてなるとなりて富人と
なるハあらゆる事多く出るにつけ凡業ハ大方其日
らしかる事なる悪業ハ貪欲にてはならぬ道理
なりき天命の分量かくれなくと知しは
まれハ其分に従ひ其楽とたのしむべしと遠慮
いひしえのまことひとつ教へとしはかり凡夫ハ

情といふもそれは心よりハ實ならずしもおもふ所ありて後にハ
得心もすれともまことハ後之さらにそれのおのれ我々とう
うかきさし得まにこゝよりして後之しらふ風情とへ
色ふかきものおのれ此きも我雷言の住給ふて凡人のよる
夜すていひこゝもとは見えてくし後の説とハこゝまて
もいひしる事哉からゆる稲置云説宮よ給てゆひ
三年ぬゆよ説神の女の豊玉姫よ嫁し御子のをも生給
ふといふに云達つら海にかへり兄の命の詔みすくに
是後とわうつうかひ海宮へのかへ命を成し給のか
時ときしの御子の事をはかくいへともかり寄は

さんらみのおのれ晴去るハ月とうる高とあるまこ高とうぬる
高根の梢間もぬれいあれよ我公用職かるに任ありまし生きのふ
御子のかわし別命守りをうおのれもしくハそのせ外出る
時のみ事とかくにこゝのをし各とせしおのれのそれ哉御座みるよ
しことにいかしもひいく書ふせり於おて日中ハ神国として
旧海の中ふしくすゝるをしくるのをもゆうゝふ神道の經典備
りしらふ事あいきしくしゝの事もや云達云いよいく
乃神人ハ天地と書いて萬物と天字よ但神なさき時ハ
天地のく萬物かよしおのれ神ハ天地の徳なりと人ハ萬物
の靈なり國ハ神明のいふ佐ゆしてちと人ハよみあつかな

其造物者に経典ハあらねとも日月かゝミのことく明か
に口味たらぬ事なし神の徳ハ風のことく蒼生ハ草
のことし不知不識天の則にしたかふ故に天神の
御代遠く地神の御代となりてハ至て人の世道成かたし
と教へなくしてハ人の道かなひかたし此故に神明の徳をかた
とりて三種の宝物作りて後代へ伝へ給ふ所とハ八咫の鏡
なり神璽とハ八坂瓊の曲玉なり宝剣ハ草薙の剣なり
鏡ハ知徳の象なり玉ハ仁徳の象なり剣ハ勇徳の象
なり鏡ハ心の神明にして虚霊不昧なるにかたとれ
りさまハいつれも見えぬ事なく至てハ正直といふ玉

為る心の温潤にして慈愛恭敬なるにかたとり玉ハ
あきらかなるハ月のことし事にあたりてハ善悪をわかつ剣ハ心の
剛強にして慎ミ蔵所あるにかたとる所なり天下に是を
ハ用ひんとし事なとをしてハ威武といふ天照大神の皇孫
天津彦彦火瓊瓊杵尊へ此国のまつりことをゆつらしめてまつり
給ふ時三種の宝物を伝へ給ふのみにして此鏡を見んこと御事
常に吾神を見るか如くすへしこと伝へよとの神勅
なりと申し日本の書紀にあり中夏の聖神伏羲氏の
始めて乾坤の画をなして六十の数をなして八卦となり
しハ八ましして六十四卦となして後の世ふみのおこりしハ八卦ハ

妙の八つへめと用ゆる事ハ天地の神道ハ一貫なり和
漢共ニよりおのづ相叶ひ妙理より凡知のかしこきといふ
ものを皆九九の数と用ゆれとも理屈(?)にもちいて七まては
ものの数のほか(?)の中まで聖人日本の神人ハ九九の一ツ
たりて帰りし八八と作して天地万物の理を尽すの人
ハ聞覚を知者也気と成とく経るものなれハ小覚
まもとたりたんと思ふ事ハ大覚と用ひ給ふにいふへし
云小知と成めまふりして聞にも後(?)には天下の人此知
後見ては大知なる人ハ恐(?)の名と得るこそ得るなる人の
知と用ゆるへきにこそかれとも是非(?)と云つ

如こと八古よりの小知の天下と治めぬるハ其代
あまり(?)なしく乗らし八除らるゝ也あり(?)しハミの徳治
ハ古今條(?)けるとも事八ミ(?)ハ倹節にして志(?)行する事
なし高(?)間にして其事なら(?)ハ天長地久なり
大知ハある(?)ハ非なりせぬ(?)にせん問まし(?)と仁者の
気となるとへ地たの様(?)は周まなりてきに先を(?)と用
る事をいふハ云此ハ富(?)なる仁ハ愛此理なり愛をもつ
新よハ妙と以て盡とその数は仁愛の心ハ至誠より
てありまはしひといふ事なし天道造化の工を見て
小蜘蛛の小虫まてもしたまつくりしたま(?)

事なし生理の至誠なるにかなへり因に父ハ君のたのみ
かくしてハ父のたのみをむくふ道をことと其中にあり
仁愛の思ひハ天理の道なり大学の綱要なる事くのふ
ハ清からかりの雑称とゆゝかしとし九年さいとひし
て八條といふなどあれハ為なる君を命と済の意なりに
人の民とつまひ事父母の孝を成思ふをかこころ教化
しめ事先立ねとし心を誠に求ましハあるへしと
いくとも遠からん問飯ハ治めるハ天のむすぶ雲とい
へり草から紀ハ日本武のまことしれとしかる名
と用ひさる事なこいうに云草ならさハ中のひかと暗もし

いへり草なくしたゝる君子の徳ハ風なり小人の徳ハ
草なりと威徳愛さ記ハ偏ことを不成の義なり同徳積と
日まへる法とら事なといふに云大滿事よ出るなる人ハ天下
まかくはにものゝうけ清るなしとくもとかにし其形
とかめかいとあつこハ自然なる正道なるこ心よ得へき名
なる思ハ天下に御しるの思緒をもの形にし正神出てしく
しるさりしもあとも事ハ行さん自然まに事なる徒
なると月見ゆるにまかくこととは豊満中納の風たりんなる
月ハ日見えてかかすみくもらぬにに月くもりぬなる影
なほらなりたまりしとめハ魚ありし人もし家すなしハ後

移し月の明かなれともかくし侍れば心知ま
しく忘れて迷ふとかくしも曇りなく諸の道にも
あはれて法の事をも分別すべくも大かた智は愚なるゆへに
こうし蔵にたとへて也思ひ給へし徳鏡と是まへに
もろ事は是は金の数々なる此程二十八宿の諸星の
日を時と定め年代をも定めしたる事かくし明徳
まし同断なる同前鏡と懐忠といふこともいへり
云いうとおもらし説と討ちもうまう智備の立てる也遠
のしまるもの懐忠の勇なるしは叶まじきにもとらし
に縁慮未練の相といへるを勇なき者は懐忠なれ

まゝ抑此明鏡をもて正直とする事をいふに外
みえ給ふそれに至りて今とは知るゆへなる霸術の
謀略なりもわからへなる明かなる者は知ぬるさかしきものは
大命に恐ず明かなる故に正直なるや同には
愛の種なりといへる慈愛とあるといふにても春秋
とかへつまりはいらん云説は愛の相なり愛する事
押うさとそれなる也と悟しみなり明鏡也玉璽鏡は
つ同倉られ神明の一徳なりわかち紀は共にして
三まへあまには天子の三種の神器にはまのたるも知仁
勇にはれもへなる鏡は知なる玉は仁なる也剣は勇なり

智ハ義なり禮ハ仁なり故ニ義ある所信ハ知の明
らかなる所より流るゝ歟元亨利貞も三種の象なることを
見よ此国の主たるハすなはち天照大神の御孫と天津
彦火瓊瓊杵尊と申奉る此神の御心ハ知仁勇の徳を
ことごとくそなへ給ふ故ニ三種の霊寶を授奉りたまふなり
火ハ此神の徳性火の光のかゝやくがごとくなるを云鏡の象な
るを瓊瓊杵ハ此神の徳性玉のまどかなるがごとくなるを云
則玉の象なり尊ハ此神の徳性劔の鋭なるがごとくなるが故
[illegible]ハ則劔の象なりされハ三種の象なりとしるべしと
いへるも既ニ御心ニ其徳をかねそなへ給ふハ天下の風

化あまねし君の御心ニ其徳おはしまさずといへども其
器のみ[illegible]天下におゐてなんの益かあらん儒者ハ
誠と云仏法ハ心をとき給ふこのことハ
同じ知仁勇を云ハ中庸の至極なりしかれハ則これ
種の名をとりてや云ハ我道ハ神道也玉草薙劔といふ
の三も中庸の至極の宗と名とハかゝる物の百物ハ
有無をとかくし相通ふの中庸東西南北戎狄を
とりて宗ある名の言ふこともいはゆる中庸の字
をとりてかくハ仏法をも生国の天竺の文字と
すれハ中庸にもかゝるものゝ字とかゝれハ名も字

まよしかはるへからす儒を以てしもなほむねとす
たまひはからくるしと云者ありし今我国の神道を中華に
みな字名義とかりしたるゆへ是はみなかりし仮名ハあ
らあらし此道ハ天地の神道なり天子の六合の日本
をさむるのしろし国と云国也とハいへる者日月星辰いさ
さかなる所ハありて運行して生々の事ハ我国の
日我国の月星とありて遣はされたる是其に
ありて天地の神道ハ形象によりてしかとの性とする名
字ハ意を説明して書事ハせられ流球の代のみしいひ
せまし其実事ハ天地一源の神道なり本来は中華聖

人の道といひ日本神皇の道とも云ハ日月をもとゝしてさかへる
なるを以日本の神道よりあり中華の聖道
もまた行ひみなもとゝする天竺の道とてもいつの代
の同じ儒の釈の春ハ花を咲夏ハ青葉をしけらせ秋に
紅葉して実をむすひ冬ハ木の葉を落し春の花ハまた咲
色ありて土のしたに落るのハたゝしつかれて清
おこるものゝ儒といひしりて乃釈といふも皆こゝにある
ましく儒の和にしまし天地の七情にそる天地の神道ちあ
らひして何ともやむことなしハ日本からも朝にも儒とて
かき寺はよしむこゝろ本節にとて人をやすく治むるの如くと伝もへし

人ハ中臣の春といはんたゞ秘々にて日本ハ春を本とし可
なるへしやもとこゝろ化の春なる春を信せしむるなり
又秘蔵なり其春夏秋冬ハ元亨利貞の理によりてこれ
を時とめくらしあらはるゝをもて元化ハ天心より教なる
の始にて正しくつらぬるをもて事にして中臣の祭礼日本の
神国にて人の秘にいふをいへとも元亨利貞を以て仁義
礼智の性によりて不明なるもなし邪用なく何かわけす
人やまりしてむこしとわけ万物一体にして私なく
しく其つくこそしたる事わりなく小体のこえかゝると
行ふしてやましく此時のあたかはふ邪る如く洪和に仁多

の徳も赤心よりたゞ秘して元ゝの事わり中臣の人の昭
なれハこそ日本より伝へしもの也けりいはゝ人
誰よりかおこりし事にいはんや人参ハ朝鮮の地より出る
御原へも日本へもとむる事もしるへしと申その霊薬を
もて服ハ日本の土地に生ると秘めし中国四海に至る
用と達するの宗ハ唐よりの宗の伝来し仁徳をもちいるを
もし人性分からしも御国よりいかなる事あらはいかにして心よ
一貫の此徳性精明なる事をはたゞに同神道伝授の秘密
なこいかハ云其秘法の其外人をなす者ハ伝をも知へし
その人ハ知して恐るへき事なりたゞ神秘ハ神秘にして密

しるしたるにまされり中庸の聖人の天地鬼神道徳を
日用に合ひしもただ正心脩身斎明の用とする
處によりて祈りしてあらはれぬは其徳
をあらはしあて用のしたまてはかならず人の感應ひ
ころもあらはれ知有たといふて敬鬼神遠之と鬼神の鬼
神たる徳を知るよしは心の誠純一ならずして祥ありとし
身躬自ら行ふには道理なくて勝てるとせしに祭
かくしとくたけましてつかふ遠ざかるにあらはれざる遠ざかるとは
尊敬すべきにあらはれざる後世の人神仏をまつりて事
とて祀るは鬼神の徳を知らずして祈るあやまちなり

代よりは宗廟の祭も春秋をりをりに後世の人まよひて加へ
まつりしして翻望とし鬼神に祈る心ありてきたるなり
らぬしも治平の道にてはなきものなり祈る物の類もなき
いはゆる云其誠といし神供をかざるは無用といへと
こころもちにせず道理とせず盛服潔斎もただ中の人これ
人の作りたるは敬ひかたしまれる其理にかなひしにあらずや
川にたまふたしく或は云使天下之人斉明盛
服以承祭祀洋洋乎如在其上如在其左右或云何事の
おそろしきものとおもひなすまじき事もいかなる
ありがたき身の潔斎よりも心の誠と云へる者なりし心の誠

致する者の潔斎とかはれる者あり神佐にまかせハ也
心なくして潔斎盛法の事はしけれはれとも何の益もなし
かくのことき恭敬ハ心おこらは錦とも事何の用三種
の神器ハ神秘なるものや云三種の神器ハ林に伝る
なしもひとつにして其象の心法ハよろつのまゝなり下庶
人の為にしも昔と倶に伐りして私しけれ義ありて何
道行く教人為にしらたのものまゝに秘事ハ紀道理
まかせ薬方なしとも六気の陽明喜怒哀正気数なとハ
業の是はあまりなく云しかし其神力たゝ事なと妙
薬こいやにものと秘にも相なれしも何の應くもゝら

すれハ論するに三種の徳ハいつれもなくこゝろえて天
なる心の邪魔を退けさるへし秘密ハ妙薬此神力
なかりし病とあるハせは神のまつりを出し給
明ハ相互にまいりし相の人し造化まてハ神の
用なる造化の後有形の主たる人なりもしもし人道
と神の冥慮と相まいる事ハ何の神明も人道とまもつの事
なりて則の理と云る者ハ神明の徳を道とすへし故に
人の道は行て神と事なれハ神よ事ることハ何の為
に事なりとしし心覚欲なくしし義をもつてしられハ
常何の心をもつく體けるやうなるにして何にかるその福

ことわりにくらき事にかつても不義をなすを
時ハ罪ありて心安き事なくおそれあり罪ふかし
邪の禍もまたありて来りけり神ハ天月にたとへ心
ハ止水にたとへし水清けれハ月影うつる水濁れハ
影もうつらすやうなり清らかなれハ神たゝすみて入
しむ惑と惑ハさる故の謂なり宇宙の主を神といふ国の
主ハ王なり身の主ハ心なり主なき時ハ心を
君とも奉るへし人の心ハ神明の一体なり心ハ一
身の主にてあれハ神明とはいふなり罪を来す事
多けれハ悉く形なく心中清浄なれハ神明

とゝましめ給ふ賞をも来り事形なかれなりけりと
かくしこしこ神勅云天照皇より瓊々杵尊に三種を
授けたまひしより鏡をさらに天神と見奉るとい
所ありしかしゝ日へととみてとのうけられし事をい
うし云建云明ハ人の法則ありて不明なれし其則と
見らへ得ありて怙息の愛と血気の勇とハ明と見へ
日本の道にハ志し徐揃なりとも思へる勇の将ハ
聞くれとも終に事成さらぬものなり共に明を失ハ
ありかは鏡をあけしるふを記ハ玉剣其中にありて知
仁勇の三つを兼れはふしと給ひ其にいへり

日本政府図書

三輪物語巻第三終

国立公文書館
National Archives of Japan